

岡田は・・・

無自覚のままにいた・・・のではないか。

職人根性には心の拡がりはない。

武市は、それを承知で岡田の剣技を買った、  
いや利用した。

どうも、その当時武市が岡田の人間を見込み、  
教育したようには思われぬ。

教育しなかった武市が悪いのか、  
岡田に全くその素養がなかったのか・・・。

結局、岡田の頼りは自分のわざ（剣技の腕）だけになった。

そうなれば、心は苛み荒れ易いし、

結末は見えている。

無理な見栄を張り、突っ張り、酒色に堕ちてゆく。

桐野は主体性をもち、

コンプレックスをばねにして

西郷にぶつかっていった。

岡田も超一流の志士武市に出会えたのだが、

桐野と違って**無自覚のまま**

**武市に媚び、**

**受け入れてもらえないことに反発し、**

**かといって飛び出すことも出来ず、**

**どんどん劣等感を深めていってしまった。**

彼は、「偉い」武市から離れるべきだったのではないか。

武市ブランドと決別し、

肩書きの無い自分がどうしたら通用するのか、

心の自立の為に自身と対決すべきではなかったか。

そうすることで、はじめて自分の芸である剣技が

本当の意味で生きたのではなかったろうか。

この二人の人生をみると、

**生きるというのはすべて己の責任であり**

**“出自”にはあまり関係がない、**

ということがよくわかる。

話はそれだが、西郷は、

アイデンティティ（自分）を持ち、

陽気な桐野を愛し、

自分には「武技」の分野についてはその思いを桐野に託し、

自分の懐刀（この懐刀に振り回されたきらいがなくもないが）

として最後まで行動を共にしている。